

ペットロス症候群

小 泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



去年の12月5日、飼い犬が死んだ。14歳だった。小さいころ、私の家には、結構動物がいた。ほぼいつも犬がいたし、猫を飼っていた時期もあった。カナリヤ、文鳥、熱帯魚、金魚などもいた。小学校の頃、土崎のお祭りで、ひよこを買ってきて怒られたり、高校生の頃、隣の生物部で拾われてきた猫をもらい受けて飼ったりしたこともあった。高校を卒業して、家を離れてから、なかなか動物と暮らす機会はなかった。こっそり大学の教室で猫に餌付けをしたりということはあったが、やはり動物のいない暮らしは、何かもの足りないものであったように思う。

私が関東地方から秋田に帰ってきたのが、平成4年だった。父も母もまだ元気であったので、親とは別々に住もうと思ったが、引っ越しのバタバタや、母の「まあ、一緒に住みましょうよ、いいじゃない」という一言で、高校を卒業して家を出てから何十年ぶりの3人暮らしが始まった。親は、私が高校生のイメージしかないし、私は社会人として自分で時間を管理していたつもりであったため、最初はそのギャップで大変であった。秋田に帰ってきてすぐに勤務した病院の傍にはペットショップがあった。そのケージに何匹かいた犬のうちで、お客さんが来て後ろに引っ込んでいた子を衝動的に買ってしまった。それが、先日死んだ犬の先代であった。犬種は、シェットランドシープドッグ（シェルティ）だった。この子は、見た目もかわいらしく、おとなしく引っ込んでいたので、お客さん

や配達の人がかわいがって頭をなでようとしたが、その際、手を噛んでしまうことが数回あった。外界が怖い子で、散歩もおびえていた子だった。乳がんの手術をした夜は、点滴などを噛み切って落ち着かなくなり、その日のうちに帰宅命令が出た。この子が17歳で死んだ。私が仕事に行っている間に、ペット葬儀会社の方が迎えに来てくれたが、それを寒い中、父が待っていてくれた。父は、以前書いたことがあるが、やや頑固で反発心の人であったが、動物に対しては素直に愛情を示す人で、動物をよくかわいがった。その日、父は血尿が出て、その後受診をして腎臓にがんが見つかった。埋葬した霊園を訪問したときに、そこの方から「守り犬」の話聞いた。飼い犬は死ぬと、主人を待っていると。私は、その子が父の守り犬だと思った。この話を聞いてから、飼い犬が待っていてくれるなら、死ぬのもそれほど怖くないなと思った。

もう犬は飼わないようにしようと思ったが、どうしても寂しく、我慢ができなくなり、平成21年に子犬を飼うことにしてしまった。我が家の飼い犬史上初めて室内で飼うことにした。犬種はミニチュアシュナウザーだった。この子が、去年の12月に亡くなった子である。毛が抜けない、丈夫、頭もいいということもあり、選んだ。当時はトイプードルが人気だったので、あえて違う子にしたような気もする。生後2ヶ月くらいで我が家に来たので、とにかく甘噛みがすごかった。私が勤務に出かけている間、両親は扱いに困って、人間のお菓子を与えまくった。

ますます手がつけられないワガママ娘になった。

平成22年、私が病気になり長期入院をすることになった。急遽、ドッグスクールに長期お預かりとなった。外泊などの時に会いにいった。驚くほど良い子にしている、トレーナーさんのいうこともよくきいていた。散歩も寄り道をしないで、まっすぐ歩いていた。私が入退院をした後、約半年で迎えに行った。室内で飼うのはやめたが、散歩の姿、甘噛みなど、すぐに以前の姿に戻った。さすがに、頭のいい犬種だと思った。この後、父は病気で治療をおこなった後、亡くなった。母は、もともとは「動物はそれほど好きではない」と言いながら、犬の気持ちがよくわかる人で、よく代弁をした。私が「犬にも気持ちがあるんだねー」と言うと、「当たり前じゃない」と、勝ち誇ったように言ったものだった。日中、私が病院勤務で家に不在の間、母は犬にこっそりお菓子をあげ続けた。菓子袋などの痕跡があったが、母はあくまで「あげていない」と言い張った。ふだんは、5.5kgくらいの体重であったが、お菓子のせいで、7kgを越えてしまい、獣医さんに厳しく指導された。その後、母もだんだんいろいろなことができなくなっていった。そして病院に入院した時は、スタッフさんたちの提案で、秋田犬の「まさる」のぬいぐるみを差し入れた。母はだっこして寝ていたようだった。母を令和3年2月に見送った。この子は、母の「守り犬になるなあ」と思った。

その後、その子との1人と1匹の暮らしが続いた。かなり元気な子で、室内にあがってこれないように柵等を張り巡らしたが、いつのまにか部屋に入り込んでいることがあった。日々鍛えているのではないかと思うくらい元気だった。一度、柵の合間にはさまっている姿を見た。最初は柵を乗り越えていたようだが、その時は脚

と背中を使って柵の間をはいあがってきたようだった。犬のきまり悪いときの表情は楽しい。昨年春、尿の回数が多くなり、糖尿病を心配して受診したところ、腎不全だった。食事と薬で管理することになった。昨年の秋には、急に前庭疾患を発症した。眼振がすごかった。動けるようになると、自分で横回転を続けて、物にぶつかって歯を折ったり、食事も柔らかいものだけになるなどと、だんだん体調が悪くなっていった。12月3日、神戸での獣医学会でのワンヘルスのシンポジウムに日帰りするつもりだったが、伊丹空港からの帰りの飛行機が秋田空港上空で旋回した後、関西国際空港に引き返してしまった。地上に近づいた時に、メールを送った。12月4日と5日朝は東京で診療報酬改訂に関わる会議があり、5日昼に秋田へ帰り、ココ（犬の名前）を迎えに行った。ココは、食事が摂れなくなってきていて、その日の夕方獣医さんに行こうと思って、外来診療をおこなっていたが、夕方には冷たくなっていた。最後は急な別れだったが、留守の間みていてくれた方たちからは「帰るのを待っていたのですね」と言われた。前の子（ナンナ）と一緒に霊園にお願いした。

さて、ペットロスだが、ならないぞと思うことにしている。自分の年齢からいうと、もう犬は飼えない。犬のことを思い返すと、そこにいた人々を思い出す。また、犬の幸せって何だろうとも思う。ココには、何人かの大好きな人がいたが、決して私が一番ではなかったと思う。それでも、私とは長い間の同居人であった。これまでの私の生活は、両親やココのおかげで、朝早く起きたり、それなりの運動をしたりしていたことになる。自分で自由に時間を使えるということは、メンタル的には必ずしも健康を保てるとは言いがたい。まずは、朝、同じような時間に起きたり散歩したりして、ペットロスにならないようにしたいと思う今日この頃である。